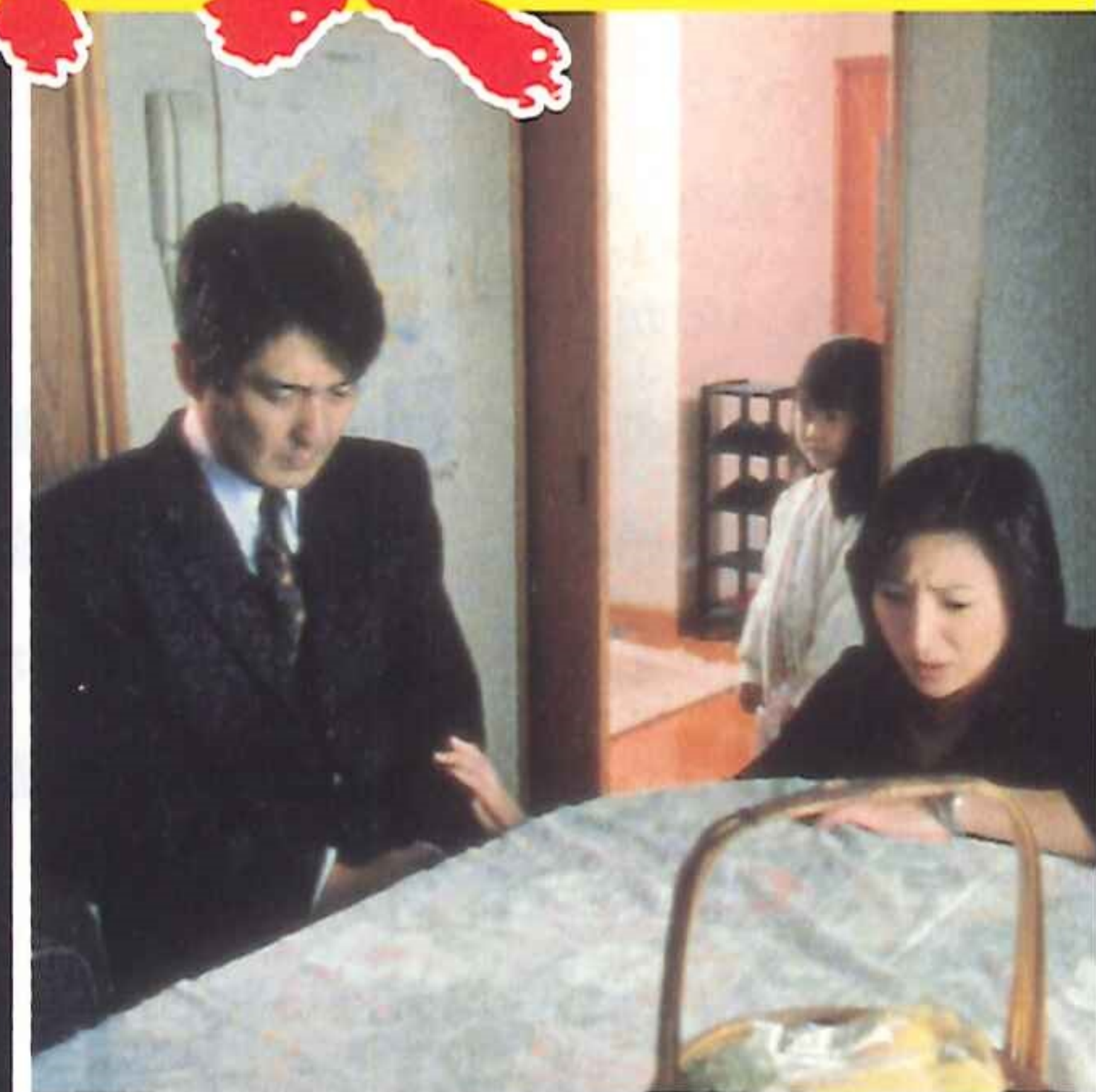
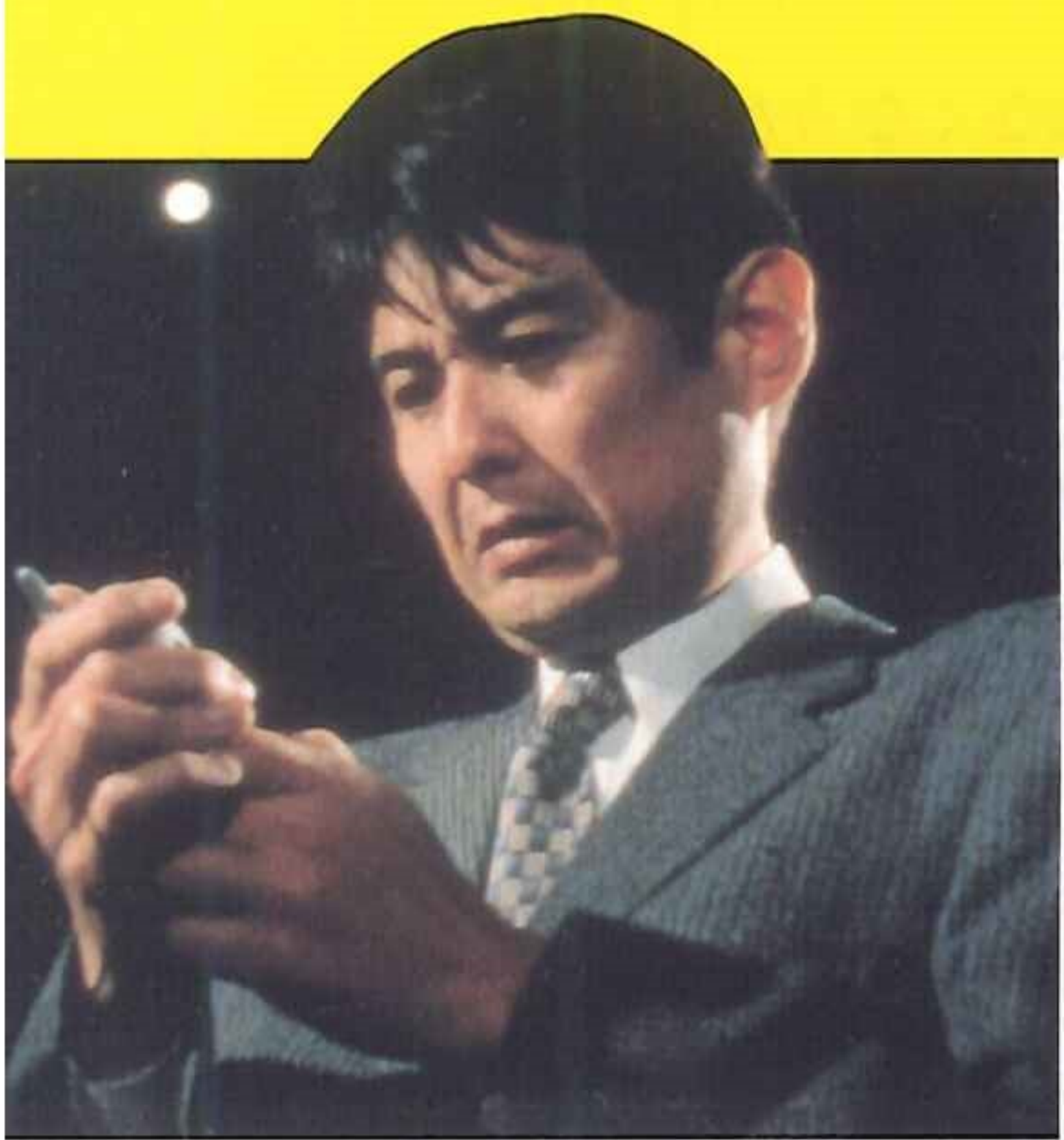


飲酒・ひき逃げ の波紋



29分

映画のねらい

ビールの1本や2本と軽い気持ちで飲酒をし、ハンドルを握るドライバーは多く、またそれは特別な人々ではなく、ごく普通の人たちなのである。

飲酒運転は車を凶器に変えてしまう。ドライバーはもう一度初心に返り、責任と自覚を持ってハンドルを握ることを肝に銘じ、安全運転を心掛け

ねばならない。

この映画は、あるドライバーが飲酒の末に死亡事故を引き起こし、更に飲酒運転の後ろめたさからひき逃げをするに至り、この事故をきっかけに被害者の家庭ばかりか、自らの家庭までもが崩壊していく悲劇を描き、安全運転を訴える。

■あらすじ

山川卓哉（32歳）は地方都市に勤めるサラリーマン。三年前にローンを組んでマイホームを手に入れた。妻の良子（29歳）も自宅で近所の子どもたちにピアノを教え、家計を助けていた。決して裕福ではないが、長女の恵（4歳）、卓哉の母の信代（63歳）と家族四人幸せな日々を送っていた。

○繰り返す飲酒運転の果てに

残業を終えた卓哉は同僚の山田と会社近くの食堂で、食事の傍らビールを飲み始める。「車だろ、止めたほうがいいぞ」と忠告する山田に、ビールの1本ぐらいどうって事ないさ、と飲み続ける卓哉。よくお酒を飲み、車を運転するが、一度も事故を起こした事がないのが自慢であった。

帰りの車中で、残業が続いた疲れからか、ついウトウトし始める。突然の衝撃で目を覚まし、車を止め、あたりを見回し愕然とする。血だらけでうごめく松崎勉（35歳）の姿があった。飲酒の後ろめたさから、その場から逃げ去る卓哉。

○遺された家族の深い悲しみ

翌朝、ひき逃げ事故を報じるテレビを見て、逃げきれないと観念する卓哉。車のキズを不審に思い問いただす良子に告白し自首する事を決意する。

警察での詳しい取調べの後起訴され、保釈された卓哉はすぐさま被害者松崎家を謝罪のため訪れ、被害者にも卓哉と同じ4歳になる娘がいること、また、被害者の妻の文子（32歳）が出産間近い事を知り、今までの自分が自らの保身しか考えていない事に気づき恥じ入る。土下座して謝罪する卓哉と良子だが追

い返される。その後何度か謝罪に訪れるが、文子の悲しみは深く、追い返されてしまう。

○家庭崩壊の悲劇

会社を懲戒解雇され、失意の卓哉は自殺を図るが、間一髪良子に制止される。卓哉の自分勝手さを詰る良子。この自殺未遂を機に夫婦の心の溝は深まってゆく。

やがて裁判で懲役二年六ヶ月の実刑判決が下り、交通刑務所に収監されることになった。近所の人たちの冷たい視線を浴びせられる山川家。良子のピアノ教室にも生徒は一人も来なくなった。

収入が途絶えることになった山川家は、住宅ローンを支払う当てもなく、家を売却し借家に移り住む。卓哉は交通刑務所に収監され、山川家の家計は良子一人が背負うことになる。信代に子どもを預け、昼に夜に働く良子。

一方松崎家では文子は、お父さんに早く会いたいと、父親の死を理解できず、淋しさを募らす長女の彩の言葉に、一層の切なさを感じていた。文子もやがて生まれる子どもと彩の二人を、女手ひとつで育ててゆかなければならない。

○交通刑務所での悔恨の日々

やがて刑務所の卓哉のもとに、良子から離婚届が送られてくる。

飲酒の誘惑を断ち切れず、被害者の人生を奪い、自らの人生のすべてを失った山川卓哉。

悔やんでも悔やんでも悔やみきれない。一人孤独に肩を震わせ、涙がとめどなくあふれてくる。しかし償いに終りはないのだ。

出 演			スタッフ			
金 田 賢 一	桜井明美	松本優花	製 作	村山治久	照 明	小野 勇
藤 森 夕 子	北川 陽	境 賢 一	脚 本	浅尾政行	音 楽	杉田一夫
	入江杏子	助川 汎	監 督	笠倉 隆	録 音	深田 晃
	竹内照夫	東映アカデミー	撮 影	上村四四六	編 集	大高 勲

配給

◆お申し込み、お問い合わせは……………



有限
会社

博映商事

〒810-0073 福岡市中央区舞鶴1丁目3番31-220号

TEL. (092) 741-0306 (代表)

FAX. (092) 741-6628